

令和8年度の校内研修実施計画

研究主題

自他を認め、安心して学び合えるなかまづくり

1 主題設定の理由

本校は、鈴鹿市西部に位置し、児童76人が在籍する全学年が単学級の令和7年に創立150周年を迎えた歴史ある学校である。本校が立地する地域は、三世代同居の家庭が多く、大人が子どもに手厚く関わり、「地域の子」として大切にされている。新興住宅地がないという土地柄、転出入も少なく、入学時から学級の顔ぶれも変わることなく学年が上がっていき、校内の雰囲気も何処となく家庭的である。

落ち着いた環境に、ありながら、「全国学力調査」や「みえスタディチェック」の結果では特に「読むこと」「書くこと」に課題があることが見えてきた。そこで、教科を国語科にし、「説明的な文章」の学習を通じて、令和5・6年度は、鈴教研の研究委託による研究発表会を経て、読解力・表現力に一定の成果は得られた。

しかし、一方で、自分に自信がもてずに自分を出せなかったり、顔ぶれが変わらないことで決めつけがあったり、人権課題に対して当事者意識がないといった姿が見られたため、安心できる学級づくりの大切さを再認識することとなった。

そこで、作年度から、研究主題を「自他を認め、安心して学び合えるなかまづくり」とし、

- 1 自分を大切にすること(自己肯定感を高める)
- 2 友だちを大切にすること(他者を認め合える)
- 3 本音が言える仲間づくり(安心できる空間づくり)

を目指して取り組んできた。自己開示には成果がみられたものの、依然、自己肯定感が低かったり、自他の違いを認め合えず他者を攻めてしまったりする姿が見られた。この課題をふまえ、今年度も研究主題は変えず、友だちの思いを受け止めたり認め合えたりできることに重きを置いて取り組みたいと考える。

2 研究の主な考え方

(1) 自他を認め とは

- ・自分を知ることから始まる。いいところばかりではなく、ちょっと短所を感じることもすべて自分、それがあってこそ自分らしさであると、受け止められることである。
- ・友だちに対しても同様である。友だちをよく知り、良いところはもちろん、苦手としていたこともまるごと理解し、協力し合える関係を構築する。

(2) 安心して学び合える仲間 とは

- ・わからないことがわからないと言える、失敗できる、励まし合える、いけないことは

だめと言えたり、見逃さないでいたりできる。飾らない素顔の自分でいられるそんな空間が学級であること。

3 目指す児童の姿

自分を大切にし、自分の思いを表現できる子

友だちの思いを受け止め、認め合える子

身近な人権課題に気づき、仲間として差別をなくそうと 行動できる子

これらのめざす子ども像を児童自身にも意識させるため、各教室に以下の内容を掲示する。

低学年

じぶんのことをともだちにしてもらおう。

ともだちのはなしをよくきいてしろう。

ともだちをたいせつにしよう。

中学年

自分のことや思いを友だちに伝えよう。

友だちの思いをよく聞いて知りつなげよう。

友だちと協力し学び合おう。

高学年

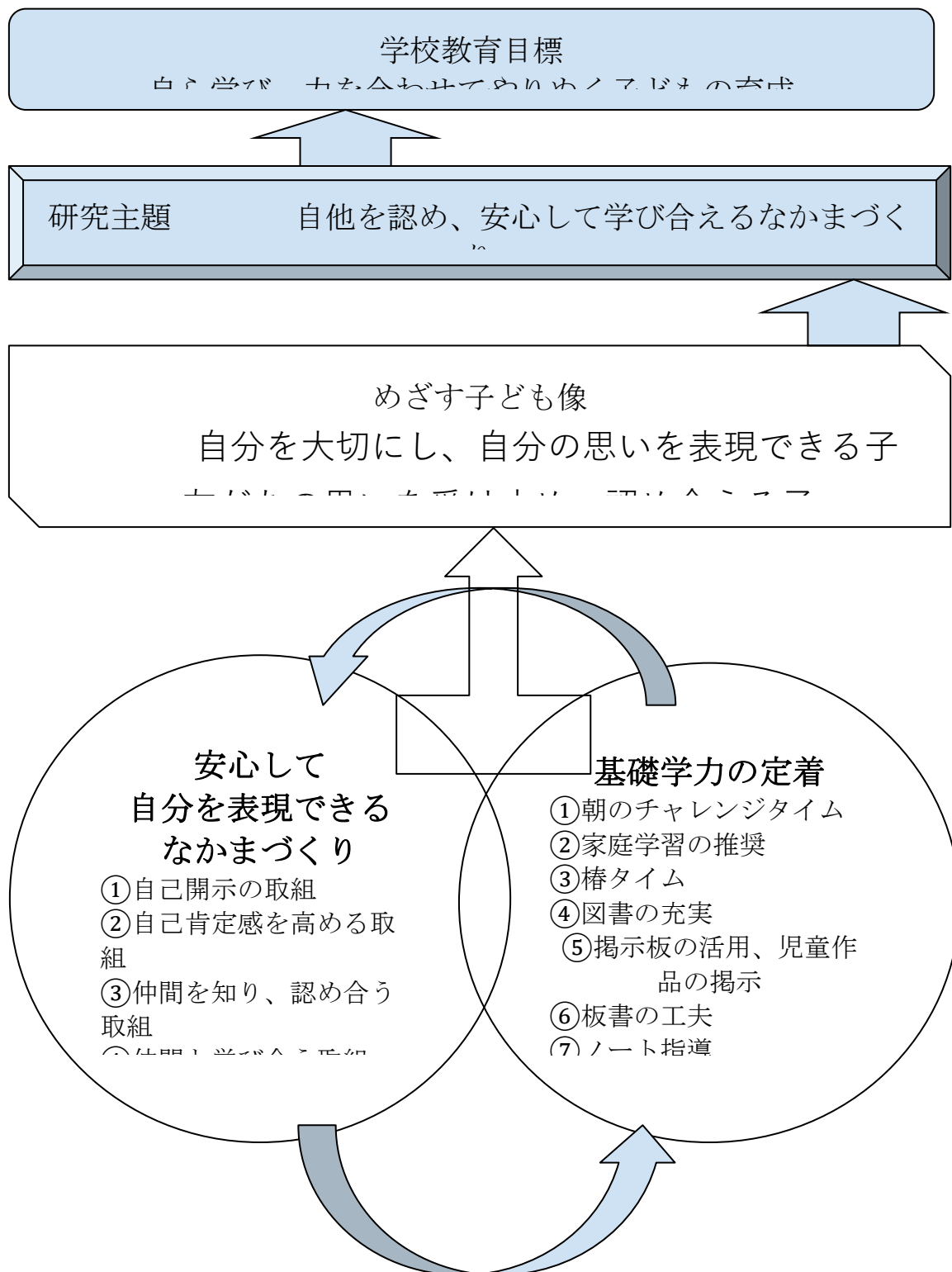
自分を理解し、自分の思いや考えを伝えよう。

友だちの思いや考えを受け止め、理解しよう。

苦手なことも出し合え、協力できる仲間になろう。

身の回りの課題に対して自分から行動しよう。

4 研究構想図



5 研修内容及び方法

(1) 安心して自分を表現できる仲間づくり

- ①自己開示の取組
- ②自己肯定感を高める取組
- ③仲間を知り、認め合う取組
- ④仲間と学び合う取組
- ⑤子どもたちの主体性を高める取組

○縦割り班活動 ①③⑤

本校は、学校行事・学校生活において、縦割り班活動を積極的に取り入れている。

「わくわくタイム」は、全校児童を縦割りにして行う班活動で、月に1回、業間休みに異年齢でのふれあい遊びを行っている。6年生が中心となって、自分たちが考えたその時間の遊びを担当教員に提案することや、下級生に遊びのルールを分かりやすく説明することで、相手に応じた話し方や答え方を身に付けている。下級生は上級生との関わりから話し方や答え方を学び、言葉で友だちとつながる経験を積んでいる。また本校では、清掃活動において「縦割り掃除」を実施している。1・6年、2・5年、3・4年がペア学年となり、毎日校内清掃に取り組んでいる。上級生が下級生に掃除の仕方を分かりやすく教えたり分担を提案したりするようにし、互いに関係を深めながら主体性を高めている。

○ポジティブカードの活用 ②③

中学校区で取り組んでいるカードである。〇〇さんへ いつ、どこで、どんなところがよかったかを記入して掲示する。普段から友だちのよいところ・よい行動を見る習慣がつき、自分の良いところや行動を肯定してもらうことで、自分に自信をもつことができるようになる。と考える。

○日記・作文 ①③

普段から「書く」ことに抵抗をなくすため、作文や日記を書く活動を行っている。「書く」ことに抵抗がなくなれば、自分の気持ちも抵抗なく書いて表現できるようになることをねらっている。

○スピーチ ①②③④

日朝や帰りの会で、自分の気持ちを伝えるスピーチ活動に取り組む。「書く」よりも「話す」が得意な児童にとって、自分の気持ちを表現できる場を作ることがねらいである。また、「話す」人がいれば、「聞く」立場もできる。友だ

ちの話や思いに耳を傾け、思いを受け止められる児童を育てるには、「聞く」ことが大切と考え、「聞く」ことのできる児童を育てる取組でもある。

○子ども主体の授業の取組み ④⑤

ICT を取り入れ、主体的・対話的で深い学びの授業を目指す。児童が自分の意見を持ち、探求し、交流して考え合える授業づくりを心がける。

(2) 基礎学力の定着のために（研究の基礎となる取組）

学力の定着を図るために、学習の基となる平素の取組が重要になる。

①朝のチャレンジタイム(月・金)

○読む書くワークシート・よむ YOMU ワークシート

令和4年度から、児童の「読む力」・「書く力」を高めることを目的に、「読む書くワークシート」・「よむ YOMU ワークシート」に取り組んでいる。低・中・高の学年部で、取り組む曜日を統一し、朝学習(8:40～8:55)の一つとして実行している。基礎基本の学力をつけるとともに、児童の取組状況や「読む力」「書く力」の定着を丁寧に観察することで、児童の現状把握にも生かしている。

②家庭学習の推奨

児童が基礎基本の学力を定着させるためには、家庭学習が重要であると考え、家庭学習の強化を推進している。年度当初に「家庭学習のてびき(椿小学校)」とその要点をまとめた「家庭学習UP5!」を児童全員に配付し、家庭での学習環境を整えられるよう保護者、児童に啓発を行っていく。また、令和5年度からは、「家庭学習の進め方」も配付し、児童の家庭学習の習慣化を図っており引き続き今年度も継続していく。



【家庭学習の進め方】



さらに、ICT 機器を活用した家庭学習も徐々に増やし、ドリルパークを活用した問題演習や新出漢字の学習やドキュメントを用いた感想文など、個別最適な学びを家庭でも進められるように取組を進めている。

6

③ 椿タイム

椿タイムは、学力向上をめざし、3年生～6年生の児童を対象に、ひとつ前の学年で学んだ内容を復習することで、学力を定着させる取組である。月曜日の6校時に年間5回実施している。算数のドリルを自らのペースで解いていき、学習ボランティアに1ページずつ採点をしてもらうようにしている。算数に苦手意識のある児童には、教員が個別指導を行い、学習内容をしっかりと定着できるようにしている。

④ 図書の充実(辞書の日常的活用, 読書の推奨, 調べ学習の充実)

○ 読書タイム

全校で、毎朝10分間(8:25～8:35)に「読書タイム」を設定し、学校図書館で借りた本を読む時間としている。読書タイムを通して、児童が読書をする習慣をつけることを目的として取り組んでいる。児童はチャイムが鳴る8:25までに着席し、自ら本を静かに読む。低学年は担任が読み聞かせをすることもある。この時間は教師も児童と一緒に読書をするにしており、落ち着いて1日の学校生活をスタートするための取組にもなっている。

○ お話宅配便

読書ボランティアを活用した、読み聞かせ「お話宅配便」を全学年で行っている。児童が本に興味をもったり自分から本を「読んでみよう。」と手に取ったりすることを目的に活動を進めている。ボランティアとの間でも読み聞かせをした学級の様子や選書等について交流を進め、お話宅配便が児童にとってより良い活動になるように考えている。

また、自分のクラスでない学級に行き、読み聞かせを行う取組もしている。

○ 学校図書館を活用した学習の充実

学校図書館巡回指導員による学校図書館の整備を進め、児童が使いやすい図書館になるよう環境整備に取り組んできた。また、国語科の授業に合わせて、学級でブックトークを行ったり関連図書を置いたりして、並行読書に取り組みやすくしている。

⑤ 掲示板の活用, 児童作品の掲示

○ 月ごとに掲示板を活用し、取り組んだ学習内容や活動を掲示していく。

自分や友だちの思いや考えを知り、理解できる手段となる。

⑥板書の工夫

めあてがはっきり提示され、授業の流れや児童の思考がわかるものを目指す。

⑦ノート指導

普段から、字の大きさ、空白の作り方、字の色分け、定規の使い方、授業の感想の記述などに気をつけさせる。

⑧めあてとふりかえりの整合性

学習活動において、めあてに正対した振り返りを大切にすることにより、児童は身についた知識や技能を確認し、その学習の意味を理解し、学んだことへの達成感を味わうことができる。そして、次への学習意欲が高まり、学力向上につながっていくと考える。

一方教師にとっても、児童のまとめ、振り返りを基に、授業で身につけるべき力がついたのかを確認することができ、次時の授業に活かすことができる。

単元を見通し、複線型学習も取り入れていく。高学年においては、単元のどこでルーブリックを取り入れ振り返りをしていくかを計画的に行っていく。

6 研修計画

No.	月 日(曜)	内容	備考
1	4月13(月)	校内研修共通理解・人権研修	
2	4月23日(木)	見続ける子の捉え方 レポートについて	講師要請
3	5月 日	共通理解(指導案様式等の確認)	
4	6月30日	全体研修授業	
5	7月 日	夏の校内研修 レポート研修 教育研究集会 発表原稿・パワ ポ・資料作り 10月の指導案検討 学年部→講師招聘→校内学年部	講師招聘
6	8月 日	複線型授業について 教育研究集会リハーサル 10月の指導案検討その2 (校内全員→講師招聘→校内全 員)	講師招聘
7	8月 24日	学調・三重スタ分析 教育研究集会	
8	9月 18日	指導案 クラスルームに公開 当日資料(児童についてなど)	
9	10月 6日	市内 人権研究発表会 3年5年	講師招聘
10	1月 日	全体研修会 児童主体の学び	
10	1月 日	全体授業研修会	講師招聘
11	1月 日()	2学期までの取り組みとカリキュラ ム見直し	
12	2月 1日(月)	研究の成果と課題まとめ	
13	2月22日(月)	次年度の研究について	
14	3月 3日(水)	研究収録完成	

7 全体研修会について

(1) 全体授業研修会

・10月6日の市内公開研究会は2本でいく。(3年・5年を予定)講師を招聘し事後研
修会にも参加していただく。6月に1本授業を公開(4年予定)。

- ・児童主体の授業1本し・授業研修とする。(1月頃)
- ・一週間前には講師先生に指導案を届ける。
- ・めだか学級は、子どもを把握してもらうためにも年1回以上は公開する。
- ・研究グループは低学年・高学年の2ブロックとする。
低学年⇒1～3年担任・めだか・教頭
高学年⇒4～6年担任・専科・校長
- ・全体授業でない学年は、少なくとも研究グループでは検討し合う。また、希望あればミニ研修などで、事前検討可能。
- ・全体授業でない学年も1週間前にはアナウンスし、できる限りみんなが参観できるようにしたい。

(2) ミニ研修会について

- ・指導のワザ・コツを互いに交流し合い、指導力・授業力の向上を目指す。
- ・30～40分程度とし、参加は希望者
例：教材分析の仕方
ICTを活用した授業実践
音読の工夫の仕方 など
研修内容の希望があれば研修部まで

8 事後研の方法

(全体研修会)※指導主事招聘

参観の視点を決めて協議し、手立ての検証をする。

(例)・自分の本音を伝えられていたか。

- ・友だちの意見と自分の意見を比べ深めていたか。

9 指導案の書き方

第は 15ポイント その他は12ポイント UD ゴシックが望ましい

第○学年 人権学習指導案

日時: 2026 年○月○日第○限

場所: 教室

指導者:

1. 題材

2. 目標 三側面のバランスを意識して作成する。文末に三側面を記入する。

- ・ 【知識的側面】
- ・ 【価値的・態度的側面】
- ・ 【技能的側面】

◇この題材を通して A につけたい力として、A の目標を記入する。

3. 指導上の考察

(1) 児童について

- ・ 学校生活の中で見せる A の実態(気になる姿)と課題について書く。
- ・ 学校生活で見せる A の姿は何に起因しているのが(生活背景)を明らかにする。
- ・ A につけたい力を明らかにする。
- ・ 本題材までの取り組みを書く。((2) 題材について (3 指導について) で書いてもよい。)

(2) 題材について

- ・ 題材についての内容
- ・ 学級にとって本題材の価値や効果
- ・ A にとって本題材の価値や効果

(3) 指導について

- ・ 題材の目標を達成するための指導内容
- ・ A への具体的な手立て

4. 指導計画(全○時間)

5. 本時の指導

(1) 本時の目標

三側面を意識して作る。(それぞれの文末に三側面を記入する。)

◇A の目標を必ず記述する。

(2) 学習指導過程

学習過程と予想される児童の反応	指導上の留意点

(3) 板書計画